進路探究セミナー開催

札幌市教委・市立高特校長会

将来について考えよう

市立高・特1年生2470人が参加

札幌市教委および札幌市立高校・特別支援学校長会主催の二十五年度進路探究セミナーが九日と十日の二日間、札幌市民ホールで開かれた。市立高校八校の一年生と山の手養護学校高等部一年生など約二千四百七十人が参加。丸吉日新堂印刷㈱の阿部晋也代表取締役＝写真＝が講演したほか、将来の夢をテーマとしたパネルディスカッションを通して、これからの高校生活や将来について考えを深めていた。

人生は出会いで変わる

丸吉日新堂印刷の阿部代表講演

札幌市では平成十五年に策定した「札幌市立高校教育改革推進計画」に基づき、将来の生き方や進路について考える「進路探究学習」を推進。その一環として毎年、新一年生対象のセミナーを開催している。

二日間日程で行い、初日は旭丘高、藻岩高、新川高、啓北商業高、山の手養護の五校、二日目は開成高、清田高、平岸高、大通高の四校の一年生が参加した。

一日目の開会式では、札幌市立高校・特別支援学校長会の富田淳一会長が「高校生活を夢をもって過ごすには何が必要かを考えてほしい」と要望。各市立高校入学後に、一年生全員が将来の夢についての作文を書いたことを振り返らせ、「セミナーを通してもう一度、自分を見つめ直してほしい」とそれぞれの夢の実現に期待を寄せた。

また、市教委の町田隆敏教育長は「日本の雇用形態は昔と大きく変わってきており、大学を卒業しただけでは企業は評価してくれない。社会の一員としてどう生きるか考えるべき」とアドバイスした。

次いで、丸吉日新堂印刷の阿部代表取締役が「人は夢を見たところまで行ける！」と題して講演した。阿部氏は、小さいころは内向的で無難な生き方を選択してきたこと、海外の大学に行きたかったがあきらめたことなどを振り返り、「夢や目標ができたときに誰に相談するか」と質問。「実際に成功している人や過去にチャレンジした人に聞くべき」と話し、人との出会いの大切さを示唆した。

また、昔は活版印刷職人がいたことや、ITの普及によって広告媒体が変わった印刷業界の現状などを説明し、「生き残るのは強い人や勉強ができる人ではない。時代の変化に柔軟に対応できる人間」と訴えた。

今は、バナナの茎を材料にした名刺をつくることでアフリカの貧しい人を救おうと「アフリカ　バナナ名刺プロジェクト」を進めていることを説明。「バナナ名刺を使うことでアフリカの人の収入が増える。お金を与えるのではなく、お金の稼ぎ方を提供することで持続可能な発展が生まれる。この仕組みで世界を変えたい。かかわる人すべてを豊かで幸せにしたい」と意気込みを語った。

さらに、「人生は良質な人との出会いで変わるもの」と話し、コミュニケーション能力の大切さを強調。「すべては夢や妄想から始まる。みんなが無理と言うことは誰もやらないのでチャンスである。たった一度の人生であり、映画の主人公のような生き方をしよう」と呼びかけた。

夢を実現するために

パネルディスカッション実施

代表生徒4人が意見交換

進路探究セミナー初日の後半は、「私の夢・将来の夢」をテーマにしたパネルディスカッションを行った＝写真＝。代表生徒四人が登壇し、夢を実現するために努力する意気込みを発表。会場の生徒たちとも将来の夢について意見交流した。

コーディネーターは㈱エフエム北海道営業編成局編成部長で、FM北海道アナウンサーの千葉ひろみ氏が務め、パネリストとして旭丘高の松田圭佑君、藻岩高の岡山拓斗君、新川高の大村羽々那さん、啓北商業高の石田ゆきのさんの四人が登壇した。

松田君は「世界の人と交流するためのコミュニケーション能力を高めたい。多くの人と明るい未来をつくりたい」と話し、将来は警察官となってマナーやルールが尊重される社会にする意気込みを語った。

外交官になりたいと話す岡山君は「得意の英語を生かし、世界の文化にふれたい。周りの人への感謝の気持ちも忘れない」と高校三年間を頑張ることを誓った。

大村さんは交通事故に遭ったときに優しくしてくれた警察官がいたことを振り返り、「困っている人に優しく接し、みんなに感謝される警察官になりたい」と話した。

保育園長を目指すという石田さんは中学校での職場訪問についてふれ、「待機児童が増えている中、保育園をつくりたい。人前で話せるよう積極性を身に付けたい」と語った。

コーディネーターの千葉氏は、四人に意見交流させ、それぞれ「警察官になってどこの部署に入りたいか」「外交官は何をする仕事なのか」などと質問し合っていた。

会場からの質問も受け付け、「どうやったら夢を見付けられるのか」などについて参加者全員で考えた。